



THE FIFTH WORLD 6

ALPHAPOLIS

藤代鷹之
Takayuki Fujishiro

アルファイト文庫



ソラ
SORA

VRMMO『クロス』出身

はやて
の姉、
その
VRMMO
世界での姿。天才的な
デザイナー
製作者プレイヤー。

ハヤテ
HAYATE

二つ名：虐殺鬼
VRMMO『クロス』出身

世界最凶最速のプレイヤー
キラー。狐の白面に漆黒の
忍装束をまとう二刀流の忍者。

アリス
ALICE

二つ名：大々魔道師
VRMMO『ゲルタニア』出身

世界的アイドルにして最強の
魔道師。美しい容姿ながら
ほとんど感情を表に出さない。

カゴトリ
CAGED-BIRD

二つ名：チート姫
VRMMO『リオール・オンライン』出身

戦いに明け暮れるプリンセス。
裾の破れたドレスをまとい、
巨大な戦斧を振り回す。

MAIN CHARACTERS
主な登場人物

エーフォー
aaaa

二つ名：勇者
VRMMO『ワールド・ワールド・
ワールド』出身

きよく
弱者を助け巨悪に立ち向かう
正義の戦士。「はい」と「いいえ」
しか話さない。

フラジャイル
FRAGILE

二つ名：序曲
VRMMO『ワールド・ワールド・
ワールド』出身

これまでアカウント停止状態だった
VRMMO 史上最悪の違反者プレイヤー。

プレザンス
Pleasance

???

エディットの心に住る
謎の少女。明るく勝ち気。

エディット
EDITH

NPC

VRMMO 世界における
HAYATEとALICEの娘。

Prologue 序曲

ラストバトル
最終決戦。

これから、幾年も——。

数十年も、あるいは百年の後も——。

末永く語り継がれていく物語、その中間地点が今である。

そもその始まりが何処であったかは、大いに意見の分かれる所かも知れない。国際仮想統一機関が『THE FIFTH WORLD』のβテストを発表した時だろうか。四つのVR MMO『Power Four』が国際仮想統一機関に接収された時だろうか。『VR MMO 監禁事件』という重大事件を出発点と捉えることもできるだろう。

何であるにしろ、全ては誰かの意思の元に端を発している。

歴史というものを客観的な事実の積み重なりとするならば、客観的とは言い難い人の意思が介在した時点で、それは歴史ではなく物語と捉えるべきなのかも知れない。

これは『THE FIFTH WORLD』の物語である。

彼女はそんな風に考え続けていた。

——さあ、私の物語の始まりは何処どこだっただろうか。

深くて暗い思考の海に沈んでいるのは、〈序曲〉FRAGILE。

彼女は今、一人である。

孤独な海を漂ただよいながら、麦わら帽子で無垢むくな少女の顔を隠していた。

上も下もない空間。

闇。

麦わら帽子を押し上げて、フラジャイルは少しだけ瞼まぶたを開いてみる。光が流れていく。

その光が何かと云えば、恒星の輝きである。大きい。大きいと咄嗟とろとろに認識できないぐらいに大きい。そして、寒い。ここは宇宙を模もしたフィールドなのだから、生物の存在を許さない過酷な環境なのは当たり前だった。それなのに、大した防御力も特殊効果もない薄手のワンピース一枚でふわふわと漂い続けている。

手を伸ばし、指を一本一本動かしてみる。

宇宙の闇と、遥かな星々。

それから、見慣れた自分の身体アバタイ。

純粹無垢だったあの頃から、何も変わらない。

何も、変えていない。

「そう。全ての、始まりは……」

彼女は考え続ける。

始まり、というものについて。

果たして、〈序曲〉としての物語の始まりは何処だったか——。

VRMMO『ワールド・ワールド・ワールド』で二つ名を与えられる程に破壊活動に勤しんだ頃だろうか。それから十年の時を経て、凍結されていたアカウントで復活した瞬間だろうか。それとも、攻略者バーティーとラウンド・テーブルに宣戦布告し、システムエラーを引き起こす事で『THE FIFTH WORLD』をダウンさせた瞬間こそが、この運命の始まりと呼び得るのだろうか。

否。そもそも、生まれ落ちた瞬間か。

否。

愛すべき人が——父親が、亡くなった時か。

「……わからないよ、パパ」

幾ら考えても、答えは得られない。

それはおそらく、決着がまだついていないからだ。

「結末に至ってこそ、物語に相応しい始まりも自然と決まる。

『何にしろ、私の意思はいつでも、どこにでもあった』

一時はまとまろうとしていた思考が再び、ちりちりに拡散し――。

それは宇宙に点在する星々のように仮想世界に満ちていく。

全て、いつも通りである。計算は万事順調だが、フラジャイルは己がナイーブになつて
いることにも気付いていた。『始まり』なんて事柄について考え始めたのも、おそらくそ
のせいなのだ。

運命はようやく、ここで最後の時を迎える。

フラジャイルはまた笑った。自らがギリオドの役目を担うことを思つて。

彼女は、最後の違反者ブレイヤーとして、〈終わり〉を象徴する存在になろうとしてい
ることを気に入っていた。〈序曲〉という始まりを象徴する二つ名と同じくらいに。

VRMMOが未成熟だった頃とは違い、今では本気で運営に悪意を叩き付けるブレイ
ヤーは自分を除いて他には存在しないのだ。

例えば、かつて神を目指す愚かな男がいた。本来ならば、彼こそが最悪にして最後の
違反者ブレイヤーになるはずだった。

国際仮想統一機関の総代表、アラン・ニコレリス——あるいは、〈火種〉LAMP。

国際仮想統一機関が『Power Four』を接收し、仮想世界の全てを掌中に収めた時から、

彼は相反する二面性を持ったトリックスターとしての役割を失い、限りなく神に近い存
在となつた。

脚本家ブレイヤーという名乗りは、運命の導き手としての矜持だろうか。それとも、た
だの自分自身に向けた皮肉だろうか。

たぶん、後者だ。

フラジャイルは勘付いていた。

彼はとても、ひねくれた男である。元々、ひねくれた性格をしていた所に、さらに人生
を歪ませるものがあつたため、彼は〈火種〉という二つ名を捨てて事もできず、己の歪み
方すら嘲笑しながら世界を掻き回した。

彼だけではない。他にも、二人の男が――。

あるいは、世界の全てが――。

「彼女に歪められた」

フラジャイルは独り、呟く。

三人の男――。

エヴァン・クレイグ。アラン・ニコレリス。楠木風人。

そして、彼らを歪めた元凶は、ジェーン・ワトソンである。

VRMMOを生み出す契機となつたBMI・BC（ブレイン・マシン・インターフェイ

ス・バイオ・チップ」を創造したその人。天才にして、悪魔のような神。『第二の現実』も、それに支えられる現代社会も、彼女の功績失くしては成立しない。死して肉体を失った後も、さらに色濃く神格化されたその存在感失われていなかった。

「ああ、気に喰わない」

フラジャイルは、素直な感情を吐露する。

まったく、色々なものが気に喰わない。

過去が――。

そして、今が――。

それゆえ、未来だけは愛せるものになることを願った。

だが、おそらく、これから世界は加速度的に閉塞していく。そう遠くない未来、『第二の現実』であるVRMMOが現実を完全に上書きしてしまった時に、ある種のデイス Tribune は完成するに違いないのだから。

高邁な理念がある訳ではない。正義や信仰がある訳でもない。

ただ面白くない。ただ楽しくない。

気に喰わない。気に喰わない。気に喰わない。

だから、フラジャイルは違反者プレイヤーを名乗り続ける。

壊すのだ。

壊して、壊して、壊して、壊して、壊して、壊して、その果てに――。

「過去と現在を破壊して……」

キーワードを口にする。

「未来へ至ろう――さあ、時代を変えようか」

フラジャイルは回想を終えた。

数多の意識を、ここに集約する。

海中を漂うような姿勢から指をパチンと鳴らすと、途端に見えない大地が広がっていった。フィールドの改変は、創作者プレイヤーの技術である。フラジャイルは自他共に認める違反者プレイヤーであったが、フィールドを創り上げることにおいても、その道で最高峰と云われる《大陸》にさえ拮抗できると自負していた。

上も下もないはずの宇宙に、上と下を生み出した。見えない地面をしっかりと踏みしめながら、フラジャイルは仰ぎ見る。

「ようこそ」

そして、敵が降って来た。

一人、二人――。

続々と。六人、七人――。

「ようこそ、ようこそ、ようこそ……」

満面の笑みで、フラジャイルは歌うように呟き続ける。

人類の未来を背負って降り立つプレイヤーが、これだけいることに心が躍ってしまう。フラジャイルは目を細め、愛すべき敵達の一人一人をしつかりと見つめていく。

《騎士団長》EINSAM。

百人のNPC（ノン・プレイヤー・キャラクター）集団であるカイト騎士団を率いる。彼ら百人のNPCは一人も欠けることなく、アインザムと共にここ、決戦の舞台に降り立っていた。

逆三角形に羽根をあしらった騎士団章が凛々しく輝く。

武器は様々だが、想いはひとつ。一人のプレイヤーと百人のNPCは整然と隊列を組んでいた。

《レトリック》permission。

鳶色のローブに隠されたアバターは、半身が骸骨化した無垢な少女。美しい声色こそが、狂気を掻き立てる凶器である。束縛系スキルのスペシャリストである彼女の言葉は、万人を縛り付ける。

骸骨の空つばの眼窩で虚空を睨み付けながら、口元は強く閉ざされていた。気配は静かながら、彼女の周囲には怒気と殺気が渦巻いている。

《機械機械》WRENCH。

頭にはキャップ帽とゴーグル、戦場に似合わない作業服。交戦者として最強の一人になったものの、彼女はそもそもが製作者である。武器の代わりの大型スパナで壁や床を叩き付けば、黒金の火器が鮮やかに咲き乱れる。

風船ガムを膨らませながら、拳銃のように抜き放った大型スパナをクルクルと回す様子は、準備万端と云わんばかりだ。

《迷路》Corner。

創作者プレイヤーの技術を併せ持った厄介者プレイヤー。十分な報酬があれば、どんな汚れ仕事でも引き受ける。檻樓を纏った寡黙な老人。口数は極端に少なく、ぶつぶつと独り言のように話す。

今回は珍しく共闘する事になった面々とも一定の距離を保ったまま、顔を伏せて、懐から取り出した錆びたナイフを片手に、音も気配も殺していた。

〈枯山〉Yog。

スライムである、巨大な。

そもそも人間のアバターではない〈枯山〉には発声器官もなく、そのため、彼の意味疎通はオリジナルな身体言語で行われる。

踊り狂うかのように、ぐねぐねとポーズ。見た目には滑稽ながら、『さあ、気を引き締めていこう』とベテランらしい真面目な台詞が他のプレイヤーにはダイレクトに伝わっていた。

〈嘘憑き〉MINO。

最後の服のつもりか、煙管をゆっくり吹かし始める。

雨の降りようもない宇宙のフィールドでも、武器を兼ねた蛇の目の傘を差していた。着流しに瘦身、いつも通りに胡散臭さを漂わせている。

「ああ、スライムの旦那。さすがに小生も緊張に身が固くなっているさ」などと、まったく身も蓋もないような台詞を煙と共に吐き捨てた。

〈加速装置〉ALTER。

着地と同時に、彼は背筋を伸ばして両手を腰に当てた。右手をぐるりと回しながら、左

手は前に突き出す。叫んだ。「竜鱗装甲、展開……変身！」と、その瞬間、閃光が迸り爆音が轟く。

アバターの全てが緑の竜鱗に覆われれば、そこに立つのは平凡な青年ではなく、正義の化身。

「序曲、この悪党め！ 今日こそは、俺が貴様を倒す！」と、飛び掛からんばかりの彼を、「レトリック」は、〈加速装置〉が動くことを許可しないにやん」と、キョカが束縛して止めていた。

〈豹柄鼠〉MINI。

シルクハットと、豹柄の派手なマント。他の面々と同じぐらに個性的な風貌ではあるけれど、彼女はこそこそと皆の後ろに回ろうとする。

「借りを返すためとは云え、こんな所まで来ることになるなんて……。うー、またまた貧乏くじの予感が……」などと、始まる前から泣きそうな顔で肩を落としていた。

「とりあえず、右に倣おうか」と一言咄く。マントを翻しながら、「竜鱗装甲、展開……変身！」と台詞までモノマネすれば、弱気な女性は正義のヒーローに様変わりする。

〈齒〉CAT-RABBIT。

くるくるくる、ピヨコン、と。そんな風に着地してからボーリングを決めるという点では、〈加速装置〉とやっている事は同じだ。ただし、〈加速装置〉がキラキラと太陽のように暑苦しいのに対し、〈菌〉はキラキラと可愛らしい。猫と兎を掛けあわせたような亜人のアバター。

手足は短い、拳闘術は他の追随を許さない。シャドーボクシングする姿は愛らしいが、一撃一撃をよく見れば、オークの太い首がスパツと吹き飛ぶぐらいの鋭さである。

「ああ、すごい。壮観だよ」

フラジャイルは拍手した。

揃いも揃った面々——正しく、最強。尽くせる限りの最善を尽くして、彼らは乗り込んできた。

それゆえ、フラジャイルは心の底から素直に、賛辞の言葉と拍手を送る。

だが、もちろん、そのような好意が受け入れられるはずもない。

返されたのは、舌打ち。

そして、げらげらと笑いながらの宣告布告が下される。

げらげら、と——。

親子でそっくりの笑い方である。

「よお、〈序曲〉。ようやく、決着を付ける時が来たぜ！」

真打ちが舞い降りてきた。

「来たね。お姫さま」

フラジャイルは微笑んで見上げた。

漆黒のドラゴンの翼を大きく広げながら、巨大な戦斧を片手で担ぐは〈チート姫〉
CAGED-BIRD。真紅のプリンセスドレスは荒々しくあちこちが破れ、頭上のティアラは歪んで曲がり、ガラスの靴のヒールはぼろぼろと折れている。

本来ならば、美しい姫君のアバターで良いはずだが、彼女はチグハグな姿で在ることを選択した。

カゴトリ——アドリアナ・シルヴァ・ニコレリスは、国際仮想統一機関の総代表、アランの一人娘である。つまり、正しく、現代のプリンセス。彼女自身がそう在ることを望むならば、カゴトリは幾らでも純粹無垢な姫君でいられたはずだ。

カゴトリの荒々しい姿は、そのまま現実の自分を否定しているようにも見える。しかし、今となってはそれが力強い意思を感じさせた。

「今日こそ、真つ二つに叩き斬ってやる」

「はい」

獣のように猛るカゴトリと対照的に、その隣で、静かに一言が呟かれる。
澄んだ空気のように、爽やかに並び立つたのは〈勇者〉エーフォー。

剣と盾、冒険者の服装。何もかも、オースドックスに固められたキャラクター。王道をひたすら地道に行く者。正しく生きる——イメージするだけならば簡単でも、実践し続ける事は難しい。彼は正しく生きてきた、人として。誰にも恥じない、自分にも。

そして、今回もまた、そんなキャラクターを貫き通そうとしている。
己の人生を、〈勇者〉という二つ名に託してここまでやって来た。

だから、彼はどれだけ苦しく、激しい戦場にも果敢に降り立つのだ。

人として、生きるために——。

人ならざる者が、世界で一番愛される人になった。

「はい」

もう一度、エーフォーはそう呟く。

いつも通り、「はい」と「いいえ」以外の言葉は口にしない。

「エーフォーさんも、やる気満々だつてよ」

カゴトリは代弁しながら、戦斧を突き付ける。

エーフォーも、剣をゆらりと構え直した。

そして、そんな風に鋭い殺気を放つのは彼ら二人だけではない。

「さて、カイト騎士団の意地を見せる時だぞ。準備はいいか？」

「……〈レトリック〉は、戦闘開始を許可するにゃん」

「正義は必ず勝つ！ 悪よ、覚悟しろ！」

「同じく……正義は必ず勝つ！ 悪よ、覚悟しろ！」

「〈豹柄鼠〉のように小賢しく、小生も世界に嘘を重ねようかね」

理由は様々。私怨のためか、金銭のためか、名誉のためか、信念のためか——まともではない。

「異世界バトルGP」で最強の座を争い、『THE FIFTH WORLD』に至った後も、常に攻略者パーティーの好敵手であった彼らは、それぞれの目的を果たすためにここに集っている。

全員の刃はびたりと、〈序曲〉に向けられていた。

「万雷炎遊」

特別スキルの発動。両手に構えた己の二刀に加えて、パーティーの仲間全員の武器に炎

を灯し、〈テーブルクロス〉 MARY は大きく息を吸って準備を整える。

「いよいよ、最後ね」

メアリは、懐かしさと共に思い出していた。VRMMO『クロス』において、前人未踏のボスモンスター〈九尾の狐〉を倒すため、〈機械機械〉や〈嘘憑き〉、そして、すれ違い

ばかりしていた幼なじみとパーティーを組んだ時のこと。

あの時は負けた。だが、今回は負けるつもりはない。

メアリには――。否。有島芽衣子には、迷いなんてもうないのだから。

「行くわよ、バカ夫婦」

最後に、この戦場に降り立った二人のブレイヤー。

忍刀と小太刀を抜き放ちながら、正面を鋭く見据える〈虐殺鬼〉HAYATE。

大杖に魔力を充填しつつ、表情を変えない〈大々魔道師〉ALICE。

メアリの景気づけの一言に対しては、「おいおい、お前も〈結婚〉している相手だぞ」

と、ハヤテから盛大な皮肉が返される。そして、「ああ、もう。揚げ足を取らないで。そ

ういう意味ではなく、あっちの……もう、察しなさいよ、このバカ!」刺すな刺すな!

戦闘開始前に味方のライフを減らすな」などと、毎度のやりとりが行われた。

「やれやれ」

ため息を吐きながら、首を横に振るハヤテ。

「珍しく真面目な顔をしていたのに、興が削がれたな」

そう云いつつも、ハヤテは、〈テールブルクロス〉の特別スキルの影響を受けて紅蓮に燃

えている忍刀を面白そうに揺らした。

それから、振り返って云う。

「子供が火遊びをするなよ?」

その言葉に、ハヤテだけでなく、全員が後ろを振り返っていた。

最強のブレイヤーばかりが集った舞台には、さすがに不釣り合いな一人の女の子。それ

でも勇ましく、ハヤテのお下がりの忍刀と小太刀を装備している。「子供とか、火遊びと

か、バカにしないで!」と、キャンキャンとかん高い声で吠え返した。

「真面目な話だ。絶対に、無理はするな」

厳しく念押しするハヤテに、Pleasanceは悔しそうな顔で押し黙る。

「で、でも、わたしだって……」

プレザンスの手は、先程から小刻みに震えていた。

緊張か、恐怖か――。

おそらく、両方である。

それらを振り払うように、彼女はぎゅっと唇を固く結んだ。

「わたしだって、エディを助けたいから……」

主役はあくまでも、十四人のブレイヤー。攻略者パーティーを中核として、最悪を終わらせるために揃った最強のメンバーである。

彼らと比較して、プレザンスは子供で未熟。ただし、馬鹿ではない。自分自身でも、この舞台に立つには場違いなレベルである事は自覚している。それでも、ここに来なければ

いけなかった。

矜持と、大切なものを取り戻すために——。

「エディ、お待たせ。ごめんね」

そう呟いて、プレザンスは刃を構える。

十四人のプレイヤーも今一度、敵を見据える。

フラジャイルは笑っていた。これだけの面子を前にして、たった一人では追い込まれたも同然の状況に見えるが、己の優位は揺るがなとばかりに余裕を見せ付ける。

「さあ、〈神〉に選ばれるのは誰かな？」

彼女は歌うように呟いた。

麦わら帽子を左手で押し上げる。

宇宙に伸ばした右手に、かつて在った痣のような輝きはもうない。

アイテム〈可能性の欠片〉——国際仮想統一機関によるメインクエスト〈新世界と新時代〉におおづ、『THE FIFTH WORLD』の全土に散らばったそれらを七つ集めれば、固有職業〈神〉が手に入るという希少なユニークアイテム。この最終局面に至るまで、様々なフィールドやイベントでアイテム〈可能性の欠片〉を巡る小競り合いが幾度も繰り返されてきた。

フラジャイルも、アイテム〈可能性の欠片〉の最初の持ち主の一人だったが、それは彼

女の意味でとあるプレイヤーに譲渡されている。

「魔王を殺せば、ゲームクリアだよ？」

指揮者のように腕を広げたフラジャイル、その背後である。

アイテム〈可能性の欠片〉、最後の一つがここにあった。

無数の鎖。

蜘蛛の巣のように張られた鎖に手足を絡め取られて、意識を失ったままなのはエディット——あるいは、最後のアイテム〈可能性の欠片〉。彼女はNPCでありながら、元々はアイテム〈可能性の欠片〉が使用される事で生み出された。メインクエスト〈新世界と新時代〉が公開されて以降、ここに至るまでの過程で判明したことがある。それはアイテム〈可能性の欠片〉から生み出されたものは、死亡ベナルティ（オブジェクトの場合は、破壊）を受けると、アイテムの状態に戻されるということ。

すなわち、エディットもまた——。

ライフが尽きれば、NPCとしての身体を失い、アイテムの状態に戻されてしまう。もちろん、そのような特殊な死亡ベナルティを受けた後でも、時間経過でNPCとして再び復活する事は可能である。ただし、メインクエスト〈新世界と新時代〉のクリア条件が満たされてしまうと、話はまた別になってくる。

アイテム〈可能性の欠片〉を七つ揃え、メインクエスト〈新世界と新時代〉をクリアし



たプレイヤーは、報酬を獲得する。このようなタイプのクエストでは、報酬を得る代わりに収集したアイテムは破壊されるのが普通だった。

すなわち、エディットには消失の危険性があった。

「大丈夫か、アリス？」

「ええ、ハヤテ。問題はない」

エディットと一心同体だったプレゼンスは、もうかなりの長い間、離れ離れの状態である。エディットを助け出し、元通りになりたいという一心で、彼女は半ば無理矢理にこの場に行っていた。

呼吸が乱れているプレゼンスを、アリスは、優しく抱き寄せる。

「……問題は、ない」

大杖から零れる、絶対零度の魔力。
凍て付いたような、無表情。

現在でも、アリスの表情に色が付くことはそうそうない。

ただし、その心まで冷め切っていると誤解するような者は、昔に比べて随分と減った。

少なくとも、攻略者パーティーのメンバーとしての彼女を知るプレイヤーならば、アリスの心の温かさを知らない者はいない。

エディットはNPCだが、愛する子供である。

アリスは、無表情のままに一筋の涙を流した。

「今、助ける」

大杖を構えた。

「エディット。あなたの為ならば、私は何者よりも強くになれる」

フリーストネヤイルド

アリス・ウォルドーフは、クリア・ジーン・プロジェクトの最初の子供である。ジェーン・ワトソンの血を引く唯一無二の存在。そして、アラン・ニコレリスの血も引いている。さながら、神のハイブリッド。現代社会において、その利用価値は計り知れない。これまで政治的に利用されないで過^こして来られたのは奇跡に近かった。

「そう、奇跡である」

独り言を漏らしたのは、フラジャイル。

彼女は、誰にも聞こえないような小声で呟いた。

「そして、ただ愛のために戦おうとするその姿も奇跡である」

フラジャイルは思わず、笑ってしまう。

アリスの隣に寄り添^そって立つのは、〈虐殺鬼〉ハヤテという大馬鹿者。戦闘にしか取り柄がなく、〈勇者〉のように世界を幾度も救うような器^{うぐわ}ではない。〈チート姫〉のように、大雑把で考え無しに見えて、本当は思慮深い訳でもない。〈大々魔道師〉ぐらいに、天賦^{てんぷ}の才がある訳でもないのだ。

本当に、彼は子供みたいに戦うだけだ。

好き勝手に、殺すだけ。我儘^{わがまま}で傲慢^{ごうまん}で、愚かで、最悪と称しても間違^{まちが}いではない、そんな生き方が、しかし、本人もそれと知らない内に誰かを救^{すく}ったりする。

人生は、わからない。

フラジャイルは、優しく笑った。

そして、思考をそこで打ち切った。

ハヤテという一人のプレイヤーに対して、フラジャイルは敢^あえてそれ以上を考えないようにする。考え過ぎると、心が鈍^{にぶ}る。

本能で、そう察していた。

ただ一つ、これだけはしっかりと認めておく。

世界なんて救えない。

しかし、そんな少年は一人の少女を救った。

「よくやった、偉いぞ。なんだかんだ云つても……」

絶対に、誰にも聞こえない小声で呟いた。

「アリスは、私の可愛い妹だからね」

前置き、終了。

「さて……」

「さて……」

奇しくも、フラジャイルとハヤテの眩きが重なり、互いに、にやりと笑い合った。

「よお。お前達、ちゃんとやれよ。」

ハヤテは振り返らず、短く告げる。

「ちゃんとやれ？ 少年、それはまさか命令かい？」

「〈レトリック〉は、〈虐殺鬼〉が偉そうにすることを許可しないにゃん」

スパナで自分の肩を叩きながら、VRMMO『クロス』の頃からのハヤテの顔見知りである〈機械機械〉は大いに苦笑した。〈レトリック〉は空っぽの眼窩でハヤテを睨み付ける。

「ヒーローは、己の正義のために行動する！ 〈加速装置〉の目的は、ただひとつ——仮想世界を脅かす悪党である〈序曲〉を打ち倒すことだけだ！」

「ああもう、この正義感野郎が暑苦しい。すぐ隣で叫ばないで」

「なあ、〈テールクロス〉。そんな風に刃に炎を灯しながら、君が、『暑苦しい』とか他人に云うのかい？ 小生も、さつきから暑苦しくて堪らん（たま）のだけどね？」

カイト騎士団の百人のNPCはこそこそ互いに小声で云い合っている。「俺達が命令を受けるのは団長だけだよな」「〈虐殺鬼〉の場合は、命令と云うよりも脅迫だ」「怖い怖い」「でも、〈勇者〉さんに従うのは抵抗なくない？」「わかる」「だって、エーフォー様

の方が団長よりも頼りになるもん」——などという会話を聞いて、〈騎士団長〉は心の中で泣いている。

「やっぱり、チームワークの欠片もないパーティーだな」

「はい」

カゴトリとエーフォーの素朴な感想。

強さよりも可愛さの求道者である〈菌〉はボーリングに忙しく、スライムの〈枯山〉はうねうねと、端から見れば踊り狂っているだけにしか見えない。〈迷路〉は先程から姿を見せていなかった。

主義も志向もバラバラのメンバーである。

ただし、目的は共通していた。

そしてまた、お互いの強さも認め合っていた。

「あはは、楽しいね」

フラジャイルはやはり笑う。

皆、自分を倒すためにやって来ていると知りながら、それでも笑い続ける。

「時代を変えようか、なんて……」

一瞬、心の底から笑った。

「もしも、私以外の誰かが……例えば、君達のような者が変わってくれと云うのなら

ば……」

始まりは、何処だったのだろうか。

それは、まだ、わからない。

しかし、終わりはここである。

ここで終わるのだ。

フラジャイルは、そう思った。

もう一つ理解していることがある。物語には、主人公が必要だ。では、『THE FIFTH WORLD』という物語においては誰だろうか。

決まっている。目の前に、こうして勢揃いしている。

だから、フラジャイルの立ち位置はこうだった。

「——世界の敵として、主人公である君達にとびっきりの戦闘をプレゼントしようか」
せめて邪悪に、笑ってやる。

「最強にして最高のプレイヤー達を招くことができた。身に余る光栄。私に力があつたならば、直接相手をしてあげたい所だよ。だけど、残念。ただの違反者プレイヤーに過ぎない私一人では、とても君達を満足させるなんてできない。そう、それだから……」

フラジャイルは云った。

「さあ、お願い。私の代わりに戦ってね、ママ」

前座としては豪華であり、強大である。

ログインのエフェクトと共に登場したのは、黒鏡の騎士だった。

泣いても笑っても、ここで『THE FIFTH WORLD』の行く末は決まる。

現在の日付は、十二月二十四日——。

βテストの三年目、最終年度の最終局面である。

フラジャイルは開戦を告げようとする。

だが、一足先、ハヤテが大笑いしながら叫んだ。

「めりー・くりすます……さあ、派手に死ね！」

そして、最終決戦が開幕する。

Borderless 境界線現象

時は遡り、最終決戦が開始されるその時から、およそ九ヶ月前——。
三月の朝である。

「それじゃあ、行ってきます」

楠木楓は、誰もいない家の中に向けてそう叫んだ。

当然、返ってくるのは静けさばかりである。

「なんだかなー」

真つ白なため息が、冬の空に溶けていく。

制服の上にコートを着込んで、マフラーはぐるぐる巻き。玄関を出た瞬間に吹きつける冷たい風を受けて、思わず足を止めて身を縮めた。「さむいさむい」と独り言を漏らしながら、ちらりと後ろを振り返ってみたのは、「行つてらっしゃい」と云ってくれる家族を無意識に求めているのだ。

「あー、冬の寒さが身に染みる」

春の温もりにはまだ遠い。

夏の鬱陶しい暑さ、秋の美しい紅葉。

季節が巡り、手足を震わせる寒さが再び帰って来るその時まで、『THE FIFTH WORLD』では長い長い戦いが続くことになるのだけだ――。

しかし、攻略者バーティヤーやラウンド・テーブルと密に関わっていた楓にも、まだまだこの先の展望は想像すら付いていなかった。

頭にあるのは、家族が帰って来るのはいつになるのか、という事ぐらいだ。

楠木家には、楓以外に誰もいない。

「……よし、行ってきます！」

無人の静寂に負けじと、楓は大きな声で玄関のドアを閉める。

両親が相次いで亡くなり、長女はふらりと旅に出たまま。楠木家は随分と長い間、静かで寂しい場所だった。それがいつの間にか、アリスが当たり前前に出入りするようになり、アドリアナが居候するようになり、楠木家は賑やかで騒がしい場所に生まれ変わっていた。

しかし、今は誰もいない。

いつもは鬱陶しいだけの兄ですら、ちょっと恋しく思える。

「まったく。いつ帰って来るのやら……」

思わず愚痴も零れる。

「お兄ちゃん、卒業式に出られるのかな？」

駅の近くを通れば、朝の混み合う時間帯であるから、他校の制服を着た生徒ともたくさんすれ違う。今日がまさに卒業式の学校もあるらしい。

何気なく楓は足を止めて、周囲を一度、ゆっくり見渡した。

賑やかである。気味が悪いぐらいに、賑やか。

並んで歩く学生達の話し声。仕事に向かうスーツ姿の男性の足音。NPCの存在感。何

もかも、少しでも違和感を覚える。日常の中にある歯車の小さな一点が何処か、噛み合わせが悪くなってしまったみたい。軋みを上げるその嫌な音が、賑やかさとして聞こえるような気がした。

少し前から、ずっとこんな調子である。

気味が悪い。

「お兄ちゃん、いつになったら帰って来るのかな？」

もう一度、小さくそう呟いた。

兄である颯やアリス、アドリアナの三人は、フランスに飛び立ったまま未だに帰国していない。

急遽決まった旅であるため、目的が果たされればすぐに帰って来る予定だった。

当初の目的である〈勇者〉との邂逅ならば、無事に済んだらしい。

だが、真の問題はその後に起こった。

それにより、予定は大幅に変わらざるを得なかったのだ。何が起こったのかは、楓も身を以て体験したから知っている。というよりも、世界中の人々が今、現在進行形で体験しているのだから。

「卒業式とか、家の事とか小さなことも、知れないけれど……」

真っ白な吐息と共に、楓は愚痴も吐き出した。

世界の命運と比較したならば、何もかも矮小には違いない。

楓は何気なく空を見上げてみた。

ここは、現実である。それなのに、非現実だった。

日常が歪んでいるのは、そのせいである。

本日は、晴れ。

ただし、冬の青空は、ほとんど見えなかった。

なぜならば、〈世界樹〉が現実の世界を覆い尽くしているからだ。

現実の世界に、世界樹がある。

エアデイスブレイに強制的に映り込み、世界中の人間を威圧するかのようにそびえるそれは、もちろん、『THE FIFTH WORLD』の中心にあつた世界樹に他ならない。

現実世界を揺るがす、仮想世界からの侵食現象——〈境界線現象〉は、緊急メンテナン

スが明けたタイミングで発生した。

プレイヤーを完全に排し、さらに一週間という十分な時間を費やしたそのメンテナン

スで、国際仮想統一機関は『THE FIFTH WORLD』に刻まれた〈序曲〉の爪痕を完全に

消し去るつもりだったがに違いない。

〈大陸〉Ontologyが密かに創り上げていた隠しフィールドをダンジョン〈魔王城〉に重ね合せ、大規模なデータの破壊と消失を狙ったその一件だけでなく、フラジャイルの稚氣と悪意は様々な形で『THE FIFTH WORLD』のシステムの奥底にまで及んでいたのだ。

現代社会で最高峰の権力と技術力を持つ国際仮想統一機関としては、一介のプレイヤーにシステムへの侵入を許した時点で負けも同然である。傷付けられたプライドを懸けて、彼らは全てを元通りにしようとした。

だが、最後の違反者プレイヤー〈序曲〉は、世界最大の組織をあつさりとは上回って見た。

〈境界線現象〉は、単純に云い換えてしまえばデータの流出である。ただし、少し付け加えるならば、それは——強制的なデータの流出と云うべきだ。

前時代のようにパーソナルコンピュータを手で操作していた頃と違い、B・Cが普及した現代においては、データの流出先はコンピュータ内に留まらな^う。『THE FIFTH WORLD』の中心にあった世界樹が流れ込んだ先は、世界中の人々の頭の中であった。

そのデータは、プレイヤーの手で自由に消去する事もできず、エアデイスプレイを介して現実と重なる。

国際仮想統一機関はこの大異変が発生した直後、すぐに公式発表を行わなければならない

かった。機関の総代表であるアランはこれを〈境界線現象〉と認めたものの、それ以上の詳細を語らなかつた。どれだけの厳しい追及に晒されても、沈黙と無表情で全てを受け流したのだ。

情報は乏しい。

何もわからないまま、人々は恐怖に取り憑かれている。

〈境界線現象〉が起きるのは二度目。VRMMO『ゲルタニア』で引き起こされたのが最初である。『ゲルタニア』の巨大フィールドが現実を侵食し、一旦は全てを無に帰すしかないという危機的状况に陥ったものの、〈大陸〉オントロジの活躍で被害は最小限に食い止められた。

世界中の人々が彼に立ち上ることを期待しているが、〈大陸〉オントロジも、〈火種〉カンテラと同じように——現実におけるエヴァン・クレイグも、沈黙を守ったままであった。

「カエデちゃん」

見えない空を見上げていた楓は、不意に声をかけられた。

「……あ。メイコさん、おはようございます」

楓が振り返ると、そこには制服姿の有島芽衣子が立っていた。

芽衣子は楓の姉である。本来ならば、気を遣わないといけない相手かも知れない

が、実際は非常に身近な存在だった。腹を割って話をするような間柄になったのは最近であるけれど、互いに問題児——楓に頭を悩まされてきたという共通点もあり、妙に気が合ったのだ。

楓は、身内や親しい友人に向けるような笑みを浮かべる。

「寒いですね」

芽衣子もまた、寒そうに手を擦りながら笑う。

「今日も一人？ あのバカも、アリスちゃんも……」

「はい、まだ帰って来られないみたいです」

芽衣子は、やれやれと首を振る。

「あーあ。こんな事になるなら、私も一緒に行けばよかった」

冗談めいた口調だが、どうやら本気で悔しい部分もあるらしい。

芽衣子は、〈テーブルクロス〉メアリである。

楓もその事実を知らされた立場のため、一時期はぎこちなくなっていました。当然ながら、あちら側で起こった〈結婚〉騒動は知っている。

「第三夫人は大変ですね」

試しに、そんな風に茶化してみると、返事の代わりに額をチョップされた。

「痛い」

「何だかんだ云つても、兄妹よね。そういう所、よく似ている」

芽衣子は大きなため息を吐く。

それから、先程までの楓と同じように世界樹を見上げた。

「今日も相変わらず、〈境界線現象〉のせいで落ち着かない」

楓はしばし、芽衣子の横顔を窺っていた。

何を考えているのだろうか——。

いや、何を感じているのだろうか——。

楓は少しだけ、そんな事を思った。

そして、トッププレイヤーの心情を察しようとする自分に気付いて、やはり少しだけ、可笑しくなる。楓は幼少の頃からずっと、トッププレイヤーの姉と兄の背中を見ながら過ごしてきた。家族でありながら、彼らはまるで日常に紛れこんだ異物のようでもある。

自分とは違うもの。普通ではないもの。理解できないもの。

多くの人がトッププレイヤーに憧れを抱くけれど、楓は、そんなものに憧れることはなかった。理解できないと諦めて、いつしか理解しようとする努力もやめてしまった。

「悔しいんですね？」

芽衣子の心は、十分に察せられた。

βテストのプレイヤーに選ばれて、『THE FIFTH WORLD』で日常的にトッププレ

イヤーに囲まれた日々を過ごす内に、楓も自身でそれと気付かないまま変わっていたらしい。

芽衣子は、きよとした顔で振り返る。

「ええ、そうね。悔しいのかも知れない」

トッププレイヤーである芽衣子には力がある。

力を使い、何かを為せる可能性を持っていた。しかし、何もしなければ、可能性は潰れていくだけだ。ただじつと待っているだけの時間は苦痛に違いない。

「攻略者パーティ^{トランブル}が結成された時に……そこに自分が入っていない事が、とても悔しかったな。まるで置いて行かれるみたいで。だから、次は絶対に置いて行かれたくない。それなのに……ああ、もう！ 私もやっぱり、一緒に行けば良かった！」

「大丈夫ですよ、たぶん」

楓は、気休めにしかない台詞を口にする。

「チャンスはきつと、また来ます。最後の舞台は、まだこれから……」

別に、何の予感があった訳でもない。

しかし、楓の言葉はある意味で予言めいたものになる。実際これから九ヶ月先のクリスマスイブの夜に訪れる最終決戦^{ラストバトル}において、〈テーブルクロス〉メアリはきつちりその大舞台に加わっているのだから。

「そうね。ありがとう、カエデちゃん」

芽衣子は微笑んだ後、気分を変えるように話も変えた。

「でも、本当に、卒業式までに帰って来ると良いわね」

卒業式という目の前に迫った問題を思い、楓と芽衣子は同時に頭を抱えた。

「まったく、あのバカ、色々と忘れてないかしら？　ようやく帰って来たと思ったら、『ああ、卒業式？　そう云えば、そんなのあったな』とか云いそう。アリスちゃんが一緒にいるけれど、あれでなかなかどうして、ハヤテと同じぐらいに抜けている所があるから」

「確かに心配ですけど……今のお兄ちゃんなら、ちゃんと帰って来ますよ」

楓は、先程まで一人で愚痴を零していた時とは正反対の気持ちを口にする。

芽衣子も苦笑しながら、「そうね」と短く肯定した。

互いに、颯のことはよくわかっている。

妹として、幼なじみとして。

付き合いの長さだけならば、他の誰にも負けない。子供の頃からよく知っているからこそ、βテストが始まって以降——あるいは、アリスと触れ合うようになって以降の小さな変化も感じ取っていた。

普通というものの。